
かたい絆

丘澄絵梨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かたい絆

【Nコード】

N7491D

【作者名】

丘澄絵梨奈

【あらすじ】

神秘部でシリウスが拷問されている夢を見たハリーは、シリウスの無事を確認しようとする。しかし、アンブリッジに見つかってしまい…。

第1章「真実薬」(前書き)

このお話は、「ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団」がベースになっていますが、ストーリーの展開が映画や原作とは異なります。そのことをご了承の上、作品をお楽しみください。

第1章「真実薬」

ハリーはアンブリッジに見つかり、彼女の部屋で問い詰められる。ロンとハーマイオニーはドアのそばで、聞き耳をたてていた。

「ミスター・ポッター、あなたには本当のことを話してもらいます。この真実薬を飲んでね」

「いいえ、絶対にいやです」

ハリーはかたくなに拒んだ。

「クルーシオ！！」

ハリーは絶叫し、床に倒れこんだ。

「あなたはこれでもまだ、飲む気はない？」

ハリーは苦しみに耐えながら、首を振った。

アンブリッジは再び磔の呪文を叫んだ。叫び声を上げ、ハリーはまたも床に倒れこむ。

「何が何でも飲んでもらうわ！！ この真実薬を！！」

アンブリッジはそう叫んで、ハリーの口を無理やりあけさせた。

そして、彼女はハリーの口に、真実薬の液体を流し込んだ。

その後、アンブリッジはハリーに質問を始めた。

「あなたは誰と連絡を取ろうとしていたの？」

「シ、シリウス・ブラック」

「彼は今、どこにいるの？」

「グリモールド・プレイス12番地」

「あなたは彼をかくまっていたの？」

「はい。」

「結構です。ミスター・ポッター。あなたをアズカバンへ連行します。殺人鬼であるシリウス・ブラックをかくまった罪及び、ヴォルデモートが復活したというウソの話をしたことについてもね。私

はコーネリウスに連絡してきます。しばらく、ここで待っていないさ
い。シリウス・ブラックが捕まるのも、もう時間の問題ね」

そういつて、アンブリッジはドアに近づいた。

そばにいたロンとハーマイオニーは、慌ててドアから離れた。

「ロン！」

「うん。みんなに知らせよう」

ロンとハーマイオニーは騎士団の本部がある、グリモールド・プ
レイス12番地へ向かった。

その後、ハリーはふたが開いている真実薬の瓶を見た。

そして彼は、何をしてしまったのかを悟った。

「ごめんなさい、シリウス…！ ごめんなさい…！」

数時間後。

ハリーはアズカバンへと送られた。

第2章「決意」

グリモールド・プレイス12番地。

駆け込んできたロンとハーマイオニーを、シリウスとルーピンが驚いた表情で見つめた。

「どうしたんだい？ 2人とも。そんなに慌てて。」

ルーピンが驚いてたずねる。

「いったい、どうしたんだ？ 2人とも。何かあったのか？」

シリウスも、2人に心配そうにたずねた。

「シリウス!？」

ロンが叫ぶ。

「やっぱり、ヴォルデモートの罠だったんだわ!」と、ハーマイオニーが言った。

「とにかく、無事でよかったよ」

ロンがほっとした声で言った。

「いったい、何があったんだ？ 詳しく話してくれないか？」

シリウスが言った。

「ハリーが神秘部で、あなたが拷問されている夢を見たの」

ハーマイオニーの言葉に、シリウスの顔色が変わった。

「私がヴォルデモートの罠かもしれないってハリーに言ったから、ハリーはあなたの無事を確認するために、ここに連絡しようとしたのよ。でも、アンブリッジに見つかってしまっただけ……」

「そうだったのか。それで、ハリーは今どこにいるんだ？」

「アズカバンに送られたわ」

ハーマイオニーが涙ぐみながら答えた。

「何だって!？」

今にも飛び出しそうな勢いのシリウスを、ルーピンが必死で制した。

「シリウス、落ち着け!」

「リーマス、これが落ち着いていられるか！ ハリーは私の無事を確認したかっただけなんだろう？ それなのに、どうしてあんなところへ！！」

「アンブリッジがハリーに真実薬を飲ませたの」

「真実薬？」と、ルーピンが聞いた。

「ええ」

「だが、たとえ真実薬を飲まされそうになっても、ハリーが飲むことを拒否すれば問題はない」

「多分、ハリーは必死に抵抗したと思うわ。だけど彼女はハリーを苦しめて、無理やり飲ませたのよ！！」

「僕たちはドアの外にいて、ハリーが苦しんでいる声を聞いたんだ。あんなに苦しんでいたのに、ハリーを助けられなかった…」

「ハリーが苦しみましたときに、私たちが彼女の部屋に乗り込むべきだったわ！！ 私もロンも、ドアの近くにいたんだから。そうすれば、ハリーを助けられたかもしれない。アズカバンへ送られずにすんだかもしれない！！ でも、私たちは何もできなかった！」

「もう何も言わなくていいよ。君たちの責任じゃない」

ルーピンが優しく言った。

「リーマスの言うとおりだよ。2人とも。だが真実薬をアンブリッジに飲まされたということは、ハリーは私がここにいることも彼女に話したね？」

「ええ、おそらくね。だから、お願いシリウス！ すぐに身を隠して！！」

「わかったよ。ロン、ハーマイオニー、知らせてくれて本当にありがとう」

「だがハリーが苦しんでいたというのが気になるな。まさか、彼女が使ったのは…」

「磔の呪いだな」

シリウスがルーピンの言葉を引き継いだ。

「私もそうだと思うわ。その後、アンブリッジはハリーに真実薬を

飲ませたんだと思う」

ハーマイオニーがシリウスの意見に賛成した。

「アンブリッジは相当ひどいな。魔法省の風上にもおけん」

シリウスたちの会話に、ムーデイが割って入った。

「なんとしても、ハリーを助けましよう」

ムーデイと一緒に入ってきたトンクスも賛同する。

「当たり前だ！！ ハリーは真実薬を飲まされただけだ。彼は無実なんだ。何もしていない。2年前、ハリーは命がけで私を救ってくれた。もちろん、ハーマイオニーもそうだ。本当に、君たちには感謝しているよ。私は少しでもハリーの力になりたい。あのときの恩を返したい。みんな、力を合わせてハリーを助けよう！！」

シリウスの言葉に、誰もがうなずいた。

第3章「アズカバン」

その日の夜。

グリモールド・プレイス12番地。

「しばらく私は犬の姿で生活するよ。そうすれば、魔法省の目を欺けるからね。」

シリウスが言った。

「私もシリウスと一緒にいるよ。ロン、ハーマイオニー、いろいろ大変だと思うが、決して希望は捨てないでくれ。私たちはなんとかしてハリーを助けたいと思っているよ。もしハリーのことで何かわかったら、すぐに知らせしてほしい。いいね？」

ルーピンの言葉に、ロンとハーマイオニーはうなずいた。

そして、彼らは煙突飛行ネットワークでホグワーツへ戻っていった。

アズカバンの最上階。

そこに位置する冷たい監獄の中で、ハリーはひざを抱えていた。普通なら寝ている時間だが、彼は眠ることができなかった。

「シリウス…」

ハリーはシリウスの名前をつぶやいた。

彼は今頃どうしているのだろうか？ もう魔法省の連中に見つかって、アズカバンへ連れてこられたのだろうか？

そうなれば、シリウスは確実にディメンターのキスを受けることになる。

「僕のせいだ！！ シリウスは無実なのに、僕が！！」

ハリーはひざに顔をうめた。

「本当にごめんなさい。シリウス…」

そのとき、ハリーはひんやりとした感覚に襲われた。

彼が顔をあげると、そこにはディメンターがいた。

ハリーは杖を持っていなかった。パトローナスさえ出すことができない。

ディメンターの襲撃に、ハリーは悲鳴を上げてその場に倒れこんだ。

そして、彼の意識は闇にのみこまれていった。

次の日。

ホグワーツではハリーがアズカバンに送られたというニュースが広まっていた。

おかげで、ハリーと親しいロンやハーマイオニーが周囲から白い目で見られることになったが、2人は気にとめなかった。

そして、授業の合間にロンとハーマイオニーが廊下を歩いていたとき、彼らはアンブリッジに会った。

「何か用ですか？」

「ミスター・ポッターと親しいあなたたちに、伝えておこうと思って。彼にディメンターのキスを実行することにしました。殺人鬼のシリウス・ブラックをかくまっていたような人ですもの。そんな人に裁判の必要はないと、魔法省が決定したのよ。彼に別れの手紙を書くなら、今のうちにすませておくことね。もう彼は永遠に戻ってこられないわ」

そういつて、彼女は立ち去った。

ロンとハーマイオニーは言葉を失い、顔を見合わせた。

もう、一刻の猶予もなかった。

第4章「ハリーを救え！」

ディメンターのキスが実行される。

そのことを知ったロンとハーマイオニーはすぐに、騎士団のメンバーに知らせることにした。

しかし、授業に出ないわけにはいかない。

そこで2人は放課後まで待って、グリモールド・プレイス12番地へ向かうことにした。

そして、授業が終わった夕方。

「ロン、あなたはシリウスたちに知らせて。私は部屋にハリーの荷物を取りに行ってくるわ。何か役立つものがあるかもしれないから」
「わかった」

ロンは煙突飛行ネットワークで、グリモールド・プレイス12番地へ向かった。

一方、ハーマイオニーは男子寮の寝室へ行き、ハリーのトランクの中から透明マントを取り出した。そのとき、彼女は紙に包まれた四角い何かがあることに気づいた。

「これ、何かしら？」

ハーマイオニーは不思議に思ったが、何かの役に立つだろうと思いい、それも一緒に持ち出した。

グリモールド・プレイス12番地。

魔法省の役人がシリウスの搜索に来ていた。

「奴はいたか？」

「いいえ、ここにはいません」

「ご苦労だった。では、ひきあげるとしよう」

魔法省の役人が帰っていく。

その後、煙突飛行ネットワークでロンが飛び込んできた。

「ロン！」

トンクスが叫んだ。

「ロンが来たわ」

彼女の言葉に、ムーディ、ルーピンそして、犬の姿のシリウスが現れた。

「もう変身をといても大丈夫だ。シリウス」

ムーディがそう言い、シリウスは犬から元の人間の姿に戻った。

「誰か来ていたの？」

「ああ。魔法省の連中だ。」

「でも、見つからなかったんだね？ シリウス。」

「私は大丈夫だよ、ロン。このとおりね。」

シリウスは笑顔で答えた。

「ポッターのことが、何かわかったのか？」

ムーディの問いに、ロンが叫んだ。

「大変なんだ！ ハリーにディメンターのキスが実行される。」

その場にいた誰もが言葉を失った。

長い間、アズカバンにいたシリウスは蒼白な表情になった。

「なんて酷な…」

ルーピンがつぶやいた。

「早く助けないと、ハリーが危ないよ！」

ロンの言葉に、シリウスは力強くうなずいた。

そのとき、ハーマイオニーがやってきた。

「ハーマイオニー」

「ハリーのトランクの中に透明マントがあったから、それを持ってきたわ。後それから、これは何かしら？」

ハーマイオニーは紙に包まれたままのものをそこに置いた。

「これは！」

シリウスにはわかった。彼が別れるときにハリーに渡した、両面鏡だった。

「シリウス、これを知ってるの？」

「ああ。これは両面鏡。私が対の鏡を持っている。鏡を通してお互いに会話ができる。」

「じゃあ、ハリーはどうしてこれを使わなかったんだよ？ この鏡でシリウスに連絡を取っていたら、こんなことには……」

そう言いかけたロンは口をつぐんだ。

「おそらくハリーはシリウスを危険な目にあわせたくなくて、これを使わなかったのよ」

ハーマイオニーがハリーの気持ちを察して言った。

（すまない、ハリー。私のために）

シリウスはハリーの気持ちに、胸がいっぱいになる。

（ハリー、必ず君を助け出す！！）

シリウスは心にかたく誓った。

第5章「手紙」

夜。シリウスは窓を開けて1羽の黒いふくろうを空へ放った。

アズカバン。

ハリーは先ほど、魔法省の役人から 明日の夜にディメンターのキスが実行されることを聞かされた。

「そんな…。裁判はどうなったんですか？」

「シリウス・ブラックをかくまっていたおまえに、裁判の必要はないと決定が出た。潔くあきらめるんだな」

そういつて、役人は去っていった。

ハリーは愕然とした。

（どうしよう。でも、シリウスもきつとここに捕らえられているはずだ。僕とシリウス、どっちが先にディメンターのキスを受けるんだろう？ もし、シリウスが先だったら謝ることもできない！！）
ハリーはふと、窓の鉄格子付近に黒い羽が見えていることに気づいた。

彼は不思議に思い、手を鉄格子の外に出した。

そのふくろうはハリーの手に包みをのせた。

ハリーはすぐにパッケージを開けた。中からは四角い鏡と1枚の羊皮紙が出てきた。

羊皮紙に書かれていたのは、シリウスの字だった。

『ハリー、すぐに君と話したい。鏡に向かって、君は私の名前を呼んでくれ。これは両面鏡なんだ。鏡を通して、お互いに話すことができる』

「シリウス： ごめんなさい。僕のためにこんな危険を冒して…。でも僕は使えない。僕には、この鏡を使う資格はない…」

ハリーは鏡を包んで元に戻した。

そして、彼はずっと隠していた羽ペンと小さく丸めた羊皮紙を取

り出した。

他のものはすべて取り上げられたが、これだけは何とか所持していることができた。

ハリーは一番謝りたいシリウスに向けて、手紙を書いた。

「お願い。これを必ずシリウスに届けて。でもシリウスも危険な状態かもしれない。だから十分気をつけてね。多分、これが僕からの最後の手紙になるだろうから」

ハリーはふくろうの足に手紙と鏡をゆわえつけた。ふくろうは飛び去っていった。

グリモールド・プレイス12番地。

「シリウス！ ふくろうが戻ってきたわ」と、ハーマイオニーが言った。

「何か持っている。手紙のようだな」

シリウスはすぐに小さな羊皮紙をあけた。そこには、見慣れた筆跡があった。

「ハリー！」

シリウスはハリーの手紙を読み始めた。

「シリウスさま」

『僕はアズカバンの最上階にいます。シリウス、本当にごめんなさい。僕は取り返しのつかないことをしてしまいました。今、あなたはどうしていますか？僕はあなたの無事を祈っています。でももし、僕と同じアズカバンにいるのなら、あなたに手紙を送るのは今日が最後です。僕は明日の夜、ディメンターのキスを受けることになりました。シリウス、今まで本当にありがとう。あなたと過ごした時間は、一生忘れないよ。そして、あなたの無実を証明することができなくて、ごめんなさい。ハリー。追伸…ロン、ハーマイオニー、ずっと友達でいてくれて 本当にありがとう』

手紙を読み終えたシリウスの目には、涙がたまっていた。

「シリウス？」

「何が書いてあったの？」

ロンとハーマイオニーが心配そうに聞いた。

「ディメンターのキスの実行は明日の夜だ」

「何ですって!？」

「つまり、明日の夕方までにハリーを助け出さなければならないということだね？」

「ああ」

「だけど、どうやってあそこまで行くの？」

ハーマイオニーが聞く。

「シリウス、君のオートバイはまだ使えるか？」と、ルーピン。

「問題ない」

「君のオートバイと箒を使ってアズカバンへ行き、ハリーを救う」

「アズカバンへは私が行く！ 危険を感じたら、この透明マントで身を隠すさ」

「わかった、シリウス。どうせ止めても、君は聞かないだろう」

「リーマス」

シリウスが微笑んだ。

「あと1人はどうするんだ？」

「私かロンのどちらかが行くわ」

「ダメだ！ これは危険だ。前に君たちがシリウスを救出したときとは状況が異なる」

ルーピンが言った。

「でも僕たちだって、ハリーのために何かしたいよ！」

ロンが言った。

「おまえさんたちの気持ちはよくわかった。だが、今回はここに残ってくれ」

ムーディの言葉に、ロンとハーマイオニーはしぶしぶ引き下がった。

「私がシリウスに同行する。必ず、彼と一緒にハリーを助けて帰っ

てくるよ。約束する。だから、君たちはここで待っていてくれ。」

「わかったわ。シリウス、ルーピン先生、ハリーを助けて！」

ハーマイオニーが涙ながらに訴えた。

シリウスとルーピンは、しっかりとうなずいた。

第6章「突入！ アズカバン」

シリウスとルーピンはアズカバンへ乗り込むため、準備をしていた。

深夜から早朝にかけて、警備が薄いだろうと考えた2人は早速出発することにした。

夜の闇にまぎれて、オートバイと箒が空高く舞い上がる。

シリウスはオートバイを運転しながら、ハリーの身を案じた。

彼の胸ポケットには、ハリーの手紙が入っている。

「無事でいてくれ！ ハリー！！」

アズカバンの最上階。

ハリーは簡易ベッドに横になりながら、シリウスのことを考えていた。

手紙の返事はなかった。

そのことがハリーの不安をいっそう現実のものにした。

（シリウス：、手紙の返事がこないということは、あなたはもう…。
ごめんなさい。あなたを救えなくて）

ハリーの目から涙がこぼれた。そして彼は、そのまま眠りについた。

しばらくして、アンブリッジがやってきた。彼女はドアを開け、ディメンターをハリーの牢内へ放った。

「本来は明日が実行日だけど、1日早くてもかまわないわ。やりなさい！」

無数のディメンターがハリーに襲い掛かった。

眠っていたハリーは急に寒気を感じて、目を覚ました。

めがねをかけた彼の目に飛び込んできたのは、たくさんのディメ

ンターだった。

（そんな……！ キスは明日のはず……！）

ハリーは考える間もなく、デイメンターの標的となった。彼は絶叫し、地面に倒れこむ。

（シリウス……）

薄れゆく意識の中で、ハリーは名付け親のことを考えた。

（やっと、あなたのところへ行ける……）

数時間後、シリウスとルーピンはアズカバンへ到着した。

その後、透明マントで身を隠しながら、ハリーが閉じ込められている最上階へと向かう。

そして、最上階へたどり着いたとき、彼らはハリーの痛ましい悲鳴を聞いた。

「あの声は……！」

「ハリー……？」

シリウスとルーピンはいつせいに走り出した。

「デイメンターのキスは明日じゃなかったのか？」

「わからない。何かの理由で早まったのかもしれない。とにかく来てよかった」

シリウスも同じ意見だった。

2人が走っていった先に、ほんの少し開いているドアがあった。

「あそこだな……！」

2人は透明マントをかぶったまま、室内へ入った。

そこには無数のデイメンターに囲まれているハリーの姿があった。

「ハリー……！」

シリウスが思わず叫んだ。彼は透明マントを脱いで、杖を構えた。

「シリウス、待て……！」

ルーピンの制止も、彼の耳には入らない。

「エクスペクト・パトローナム!!」

シリウスの一撃で、ハリーの周りに群がっていたディメンターが散っていった。

しかし、まだ半数以上いる。

(ジェームズ、力を貸してくれ! ハリーを助きたいんだ!)

「エクスペクト・パトローナム!!」

シリウスは再び、パトローナスの呪文を唱える。

彼のハリーを助けたという強い思いが、その場にいたディメンターをすべて追いはらった。

「ハリー、しっかりしろ! ハリー!!」

シリウスは意識を失っているハリーを抱き起こし、必死に呼びかけた。

しかし、ハリーが目覚める気配はない。

「シリウス、ハリーは?」

「気を失ったままだ。いずれ気がつくとは思うが。だが、いつまでもゆっくりしていられない。 リーマス、すぐにここを出るぞ」

シリウスは意識を失っているハリーを抱きかかえ、透明マントをかぶった。

「わかった。私はハリーの荷物を持ってくるよ」

シリウスはハリーをかかえて、オートバイへと向かった。

そしてルーピンはアズカバンの別棟にある荷物置き場へ、ハリーの荷物を取りに行った。

その後、3人はグリモールド・プレイス12番地へ戻った。

第7章「再会」

アズカバンから戻ったハリーだったが、その後彼はずっと意識が戻らなかった。

様子を見に来たダンブルドアは、ディメンターの影響が大きかったんだろうと言った。

シリウスは食事のとき以外、ハリーのそばをかたときも離れなかった。

（ハリー…）

痩せて一回り小さくなったハリーの体をシリウスは痛々しい表情で見た。

アズカバンでの生活がハリーの体力を奪ったのだ。

シリウスはハリーの意識が戻ることを願い、ずっと手当てを続けていた。

その日の夜。

「シリウス、少し休んだらどうだ？」
ルーピンが声をかけた。

「大丈夫だ。ハリーが目を覚ましたときにそばにいてやりたい。私を心配して こんなことになってしまったんだから」

シリウスはいまだに意識の戻らないハリーの手を握り締めながら、言った。

「明日で1週間だな」

「そうだな…。 リーマス、時々思うんだ。ハリーはもう、このままなんじゃないかって…」

「シリウス…！」

「明日で1週間になるんだぞ！ もう意識が戻ってもいいはずだろう。こんなに長いこと意識を失ったままなんて」

「シリウス、気持ちはわかるが、希望を捨てずにいよう。きっとハ

リーは目を覚ますと」

「そうだな、リーマス。だがあのとき、私たちがもう少し早く駆けつけられたら、ハリーはこんなことにならなかったのかもしれないな」

「確かにそうかもしれない。ディメンターのキスの実行も早かったようだし」

「誰かがハリーを陥れるためにたくらんだのか…?」

「それはどうかわからないけどね。とにかく明日の朝には、ハリーの意識が戻るように願おう」

「ああ」

「おやすみ、シリウス」

「おやすみ」

ルーピンは部屋を出て行った。

シリウスは眠らずに、夜通しハリーに付き添っていた。

「ハリー、頼む。目を覚ましてくれ…!」

そして、翌朝。

朝の日の光がシリウスの顔を照らす。

「ん…」

そのまぶしさにシリウスは目を開けた。

どうやら、知らない間に眠ってしまったらしい。

「ハリー…」

シリウスはハリーの手を握り、彼に呼びかけた。

ハリーの瞳は閉じられたままだった。

また今日もダメかとあきらめかけたそのとき――

「…ス…。シリ…ウス…」

「…ハリー!？」

シリウスが握っていたハリーの手がかすかに動いている。

同時に目元から涙が零れ落ちていた。

（いやな夢でも見ているのか…?）

シリウスは指で、ハリーの涙をぬぐった。

ハリーはシリウスがディメンターのキスを受けるといふ悪夢を見ていた。

「お願い、やめて！ その人は無実なんだ！！」

ハリーが叫ぶが、魔法省の役人に体をおさえられる。

「いやだ…！ シリウス！ シリウス！！」

ハリーの目の前で、シリウスはディメンターに魂を奪われていく。

「シリウス…！ シリウス…」

「ハリー、しっかりしろ。ハリー！」

強い力で肩を揺さぶられ、ハリーはゆっくりと目を開けた。

窓から差し込む日の光に、思わず目を細める。

「夢…？」

「大丈夫か？ ハリー」

優しく呼びかけるその声に、ハリーは声の主を見上げた。

めがねをかけていなかったたので、視界はぼやけていたが、彼の目の前にいる人物はまぎれもなくシリウスだった。

「シリ…ウス…？」

ハリーは消え入りそうな声で、彼の名前をつぶやいた。

シリウスはハリーの手にめがねを渡した。ハリーがそれをかける。

ぼやけていた視界がはっきりし、彼の目にはシリウスの姿が映っていた。

「ハリー… よかった」

シリウスが優しく微笑んだ。

「シリウス、夢じゃないよね？」

「夢じゃないよ。ハリー」

彼の言葉に、ハリーの目から涙がこぼれた。

ハリーはベッドから起き上がってシリウスに抱きつく、声を上

げて泣き出した。

シリウスはそんなハリーを、強く抱きしめた。

第8章「ひとときの安らぎ」

「すまない、ハリー。君をこんな危険にさらしてしまつて」

「ううん。ごめんなさい、シリウス。僕はあなたのことを話してしまつた……!」

「君のせいじゃないよ、ハリー。真実薬を飲まされれば、誰でも話してしまうことだ。君が気にする必要はないよ」

「でも……」

そう言いかけて、ハリーは周りを見渡した。

「ここは……? アズカバンじゃない」

「そうだよ、ハリー。君は帰ってきたんだよ」

「でも、僕がアズカバンにいたことを、いったい誰が?」

「ロンとハーマイオニーが私たちに教えてくれたんだ。君がアズカバンへ連れて行かれたとね。それに、君からのこの手紙でディメンターのキスが実行される日もわかった。予定より早かつたようだけれどね」

ハリーは手紙がシリウスに届いていたことを知って、ほっとした。「よかった。返事が来なかったから、僕はてっきりあなたがディメンターのキスを受けたのかと思っていた」

「心配をかけてすまなかつた。だが、君を安全に助けるためにはこの方法しかなかったんだよ」

「もしかして、あなたが僕を助けてくれたの?」

「ああ。2年前に君は私を命がけで救ってくれた。だから少しでも君の力になりたかつたんだ」

「ありがとう、シリウス。でも、僕を助けるためにあなたが危険な立場に……。本当にごめんなさい」

「ハリー、人生に危険はつきものだよ。それに、君の透明マントがあつたから、ずいぶん助けられた。私は誰にも姿は見られていないから、心配しなくていいよ。さあハリー、もう少し休みなさい」

シリウスはハリーをゆっくりとベッドへ寝かせた。そして彼の
手を両手で握る。

「私はここにいるから、ゆっくり眠るといい」

「うん」

ハリーはシリウスの手のぬくもりを感じながら、眠りへと落ちて
いった。

シリウスがそばにいてくれるという安心感が、ハリーに心地よい
眠りを与えてくれた。

（ハリー、君が無事で本当によかった）

穏やかに眠るハリーを、シリウスは優しいまなざしで見つめてい
た。

第9章「神秘部での戦い」

意識が戻ってから、ハリーはしばらく ベッドで寝たり起きたり
の生活だった。

すぐには体力が戻らなかったが、少しずつ回復のきざしがあった。
ハリーの意識が戻ったことを知ったロンとハーマイオニーは、ホ
ツと胸をなでおろした。

2人は授業を終えると、煙突飛行ネットワークで グリモールド・
プレイス12番地へやってきた。

「ハリー!!」

「ロン、ハーマイオニー!」

ベッドに横になっていたハリーは、体を起こして座りなおした。

「本当によかったよ。君の意識が戻って」

「でも：ごめんなさい、ハリー。私たちがあなたを助けられていた
ら、こんなことは起きなかったはずよね」

そういったハーマイオニーに、ハリーは首を振った。

「君たちがシリウスやみんなに僕のことを知らせてくれたんだろ。
ありがとう」

「具合がよくなったら、またホグワーツで会いましょうね」

「もちろんだよ!」

ハリーは笑顔で答えた。

「君が元気になって帰ってくるのを待ってるよ」

2人はハリーにそういうと 煙突飛行ネットワークで、ホグワー
ツへ戻っていった。

そして、夜。

「ハリー、辛いことを思い出させてすまないが、いったい何があっ
たのか 教えてくれないか? ハーマイオニーは私が拷問されたと

言っていたが……」

ベッドで休んでいたハリーに、シリウスがたずねた。

「あれは試験の後だった。ヴォルデモートが魔法省であなを苦しめているのを見て……。僕、いてもたってもいられなかったんだ！　それで、あなたの無事を確認しようとしたらアンブリッジにつかってしまったんだよ。シリウス、本当にごめんなさい。僕がもつときちんと、閉心術を学んでいたら　こんなことにはならなかったのに……」

「起きてしまったことは仕方ないさ。これから先をどうするかだ。ヴォルデモートはそのとき、何か口にしていなかったか？」

「予言がほしい……とか言っていたような気がするけど……」

「予言か。ハリー、場所が魔法省のどこなのか、思い出せるか？」

「わかるよ！　僕、何度も夢に見ていたから」

「わかった。騎士団の皆に知らせて　戦いに備えておこう」

「うん……！」

そこへ、ドアが勢いよく開いて、ルーピンがやってきた。

「リーマス、どうした？」

「大変だ！　シリウス。ヴォルデモート一味が魔法省に入り込んだらしい」

「なんだと……？」

ハリーも驚いて顔をあげた。

「これから我々は魔法省へ向かうが、君はどうする？」

「もちろん、行くさ」

そう答えたシリウスをハリーが制した。

「待って、シリウス！　あなたは魔法省に追われている身でしょう？　もし見つかって、またアズカバンに送り返されたら……」

「ハリー、私は少しでもいいから、騎士団の役に立ちたいんだ。わかってくれるね？」

「わかったよ……。でも、僕も一緒に行く……！」

「ダメだ！　君はまだ体力が完全には戻りきっていないんだ」

「でも今回のことは、僕にも責任がある。お願いだから一緒に行かせてよ!」

「…わかった。だけど、絶対にムチャはするんじゃないぞ。ハリー」
ハリーはうなずいた。

ハリーはシリウスや騎士団のメンバーとともに、魔法省へと向かった。

そして、省内にある神秘部へと足を踏み入れた。

「ここは」

「ハリー、この場所を知っているのか?」

シリウスがたずねた。

「うん。僕が夢で何度も見てきた場所だよ」

「ということは、この中にヴォルデモートたちが求めているものがあるということだね」

ルーピンが言った。

「こんなところまで、よくきたな」

その声に、ハリーたちは振り向いた。

そこには、デス・イーターが待ち構えていた。ルシウス・マルフォイやシリウスに濡れ衣をきせたピーター・ペティグリュー、彼のいとこのベラトリックス・レストレンジもいた。

「早速、お出しましたな。ハリー、私のそばを離れるな!」

シリウスの言葉にハリーはしっかりとうなずいた。

「いいか。気を抜くなよ!」

「わかっているわ」

トンクスが答えた。

デス・イーターたちとの戦いが始まった。

騎士団員たちは予言の球を守るべく応戦したが、デス・イーターとの激しい攻防によって、すべて割れてしまった。

一方、ハリーはシリウスと共に、ルシウスそして 仲間のデス・

イーターと戦っていた。

ルシウスの攻撃から、身を挺してハリーをかばうシリウス。

「シリウス！ 大丈夫？」

「大丈夫だ。油断するなよ、ハリー。かなり手ごわいぞ」

ハリーはシリウスの言葉にうなずき、厳しい表情で敵を見据えた。そこへ デス・イーターの1人が攻撃をしてきた。ハリーはすんでのところかわし、武装解除の呪文を唱えた。

「エクスペリアームス！！」

「いいぞ！！」

シリウスが優しく微笑んで、ハリーを見る。ハリーもシリウスに微笑み返した。

だが、そのときだった。シリウスのいところであるベラトリックスが背後から忍び寄った。

気配を感じたシリウスは思わず振り向いた。

「アバダ・ケダブラ！！」

緑の閃光がハリーに向かって放たれた。

「ハリー！！」

シリウスはハリーのそばへ駆け寄り、彼をかばうように前に立ちはだかった。

「……シリウスっ！！」

ハリーの絶叫が神秘部内に響き渡った。

第10章 「神秘部からの帰還」

「シリウス……！！！」

ハリーは愕然とした。

だがその光はシリウスに届く前に、そこに割り込んだ巨大な炎によって飲み込まれた。

「ダンブルドア先生！」

「ハリー、こっちへ来るのじゃ」

ダンブルドアはハリーを物陰へと避難させた。

「先生、シリウスは！？」

「安心おし。無事じゃよ」

ダンブルドアはハリーをその場に残し、戦いへ戻った。

「シリウス」

「ダンブルドア」

「これを」

ダンブルドアはシリウスに移動^{ポート}キーを渡した。

「ハリーを連れて、ここを去るのじゃ」

「しかし……！」

「行くのじゃ。後はわしたちが引き受ける」

「……わかりました」

シリウスは移動^{ポート}キーを持つと、ハリーを探した。

そして、物陰にハリーの姿を見つけると そばへ駆け寄った。

「ハリー！」

その声にハリーは顔を上げた。

そこには、先ほど戦っていたときとかわらないシリウスの姿があった。

「シリウス……」

「大丈夫か？」

シリウスがハリーの手を取って立たせた。

「これにつかまれ!!　ここを出るぞ」

シリウスが叫ぶと同時に、ハリーも移動^{ポート}キーに手を伸ばした。
2人の姿が神秘部内から消える。

グリモールド・プレイス12番地。

「ここは…?」

「私の屋敷だ。どうやら、戻ってきたようだな」
途端に、ハリーが床に膝をついた。

「ハリー!？」

シリウスがしゃがみこんで、心配そうに彼の顔を覗き込む。

「大丈夫か?　体力が戻っていない状態で戦ったんだ。疲れるのも無理はない。部屋へ行って、ゆっくり休むといい」

「…だよね?」

「ん?」

「本当に…シリウスだよね?　僕、あなたがあのデス・イーターの攻撃を受けたとき、生きた心地がなかったよ!!　あなたが…父さんたちと同じように死んでしまったんじゃないかって…!　また1人になってしまふんじゃないかって!!」

その先は言葉にならず、ハリーの目から涙があふれた。

「ハリー」

シリウスはハリーを自分の胸に抱き寄せた。

「すまない。心配をかけたな」

「よかった。あなたが無事で…」

「さあ、もう遅いから上へ行って眠りなさい。今夜はそばにいるよ」

シリウスはハリーの肩を抱いて、上の階へ向かった。

ハリーはベッドに横になると、すぐに眠りにおちた。

シリウスはハリーの手を握り、ずっとそばに付き添っていた。

第11章「ピーター、逮捕」

数時間後。

神秘部からルーピンたちが戻ってきた。

「ハリー、シリウス。戻ったぞ」

だが、そこにハリーとシリウスの姿はない。

「上じゃないかしら？」

トンクスに言われ、ルーピンは上の階へ向かった。

2階にあがったルーピンは、一室のドアが細く開いているのに気づいた。

彼は音を立てないように そっとドアを開けた。そして中にいる人物を確認して、ホッと安堵の息をついた。

「シリウス…」

その呼びかけに、シリウスが振り向いた。

「リーマス」

シリウスは握っていたハリーの手をそとはなすと ルーピンの元へ歩み寄った。

そしてハリーを起こさないように注意しながら、そっとドアを閉めた。

「大丈夫か？」

「ああ。それよりもシリウス、うれしい知らせがある。ピーターが捕まったよ」

ルーピンの言葉に、シリウスは目を見開いた。

「本当か！？ リーマス」

「真実薬を飲まされてね、すべてを白状した。このことは、明日には公になるだろう。シリウス、君の無実が証明されたんだよ」

「この日をどんなに待ったか…」

「本当に今まで、よく耐えたよ。シリウス。明日になれば、君は自由の身だ」

「ああ。知らせてくれて、感謝するよ。リーマス」

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみ」

部屋へ戻ったシリウスは、ハリーが眠るベッドの脇に腰を下ろした。

（ハリー、私の無実が証明されたよ。君は明日、ホグワーツで知ることになると思うから黙っておこう。2年前の約束を、やっと果たすることができるな）

第12章 「証明された、シリウスの無実」

神秘部での戦いが終わった翌日。

体調が回復したハリーは、ホグワーツへ向かった。

ロンやハーマイオニー、グリフィンドール寮の面々はハリーをあたたく迎えた。

そして、いつものように 広間での朝食の時間がやってきた。

ハリーがロンと一緒に広間へ向かうと、すでに広間にいたハーマイオニーが新聞を手に 2人のもとへ駆け寄ってきた。

「いったいどうしたんだよ？ ハーマイオニー」

「そんなに慌てて、どうかしたのかい？」

「とにかく、これを見て！」

ハーマイオニーは新聞記事を指さして言った。 ハリーとロンが同時に記事のをぞきこむ。

記事を見て、ハリーの表情が変わった。

「これって……！」

新聞に載っていたのは、シリウスの無実を証明する記事だったのだ。

「シリウスの無実が証明されたんだ……！」

ロンが叫ぶ。

ハリーは喜びと驚きのあまり、声も出なかった。

「よかったわね、ハリー。これで、シリウスと一緒に暮らせるじゃない」

ハーマイオニーの言葉で我にかえったハリーは、笑顔でうなずいた。

「よかったな。ハリー」

「ああ。ありがとう」

その後の授業は、ハリーにとってはものすごく長く感じられた。集中しようと努力したが、なかなかうまくいかなかった。

そして、授業が終わった夕方。ハリーの元にふくろう郵便が届いた。

差出人の名前は――「シリウス・ブラック」。

（シリウス…）

もう名前を隠す必要がないとわかり、ハリーはうれしかった。

彼は封を開けて、中の手紙を読んだ。

第12章 「証明された、シリウスの無実」 (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7491d/>

かたい絆

2010年10月8日13時53分発行